

分布調査報告書

三刀屋町の遺跡Ⅳ

鍋山地区（禪定寺周辺）

1991年3月

島根県三刀屋町教育委員会

序

当初は平成元年度で終了する予定であった遺跡詳細分布調査が、実際に調査に入ると、数多くの遺跡が発見され、調査期間を延長し、全町4年の歳月をかけてようやく本年度完了する運びとなった。ことに鍋山地区は從来比較的に遺跡の少ない地として捉えていたが、古刹禅定寺とその周辺が未調査ということもあって、予想外に時間を費した。

密教寺院禅定寺は、全国的に見られるように戦国時代においては格好の城塞として利用されたと思われ、盛時には42坊を数えたの伝承もあるが、いくつかの坊跡も確認でき、隣接した山城との関連等、本町の歴史を解明する上で今後に課題を提供した。

なお、この遺跡詳細分布調査を終了するにあたり、各地区の古老の方々を中心に、歴史や文化財に関心をもつ人が積極的に協力し、情報を寄せられた。さらに、それぞれの地域別に、調査の完了の都度、調査報告会を行なったが、各地域とも多数の参加を得ることができ、熱心に質問されるなど、文化財に対する関心を高めることになった。

本町は遺跡の多い町である。それも縄文の昔より近世に至るまでとぎれることがない。また、町内に国道が2本通っている交通の要衝地でもある。その関係で開発も目白押しであって、文化財の保存と開発をめぐる問題も多い。このたびの遺跡詳細分布調査は、本町においては極めて時宜を得たもので、文化財保護行政を進める上で、開発との調和を図るよい資料として期待できる。

終りに、昭和62年度より調査実施以来、県文化課に並びに蓮岡法暉、杉原清一両氏の懇切丁寧なご指導に深く感謝申し上げる。併せてこの調査の実施にご協力をいただいた地元関係者各位に厚く御礼申し上げ、調査完了のご報告に合わせ、刊行のご挨拶とする。

平成3年3月

三刀屋町教育委員会教育長

若槻喜吉

例　　言

1. 本書は三刀屋町教育委員会が、平成二年度国庫及び県費の補助を受けて実施した三刀屋町全地域及び昨年度調査が一部未完成であった禅定寺周辺の遺跡詳細分布報告書である。

2. 調査体制は以下の通りである。

調査主体者 三刀屋町教育委員会

　　教育長 若槻喜吉

調査指導者 蓬岡法暉（島根県文化財保護指導委員）

　　杉原清一（　　　　　　〃　　　　　　）

　　丹羽野裕（島根県教育委員会文化課主事）

調　　査　　員 板垣　旭（三刀屋町教育委員会文化財専門員）

事　　務　　局 谷戸邦大（三刀屋町教育委員会教育次長）

　　太田昌人（　　　　　　〃　　　　　　社会教育係長）

　　杉原律雄（　　　　　　〃　　　　　　社会教育主事）

3. 調査成果は本書において分布図及び一覧表とし、大部分の遺跡については概略と図面をのせたほか、遺跡カードを作製して遺跡台帳とし、三刀屋町教育委員会と島根県教育委員会に保管する。本書の遺跡の概況については今回の調査が地表面観察によるものであり、過去に発掘調査をされた遺跡以外は私見をはさむと誤解をまねく恐れがあるのでできるだけ表面観察による客観的事実と文献記載事項、そして口碑伝承だけを記述した。なお遺跡番号は『島根県遺跡地図Ⅰ』（1988年）及び『三刀屋町の遺跡Ⅲ』（1989年）を踏襲した。

4. 本書および調査には主に「三刀屋町管内図」5千分の1を使用した。方位は磁北を示す。

5. 本書に記載した地名は『三刀屋城跡調査報告書Ⅲ』（1984年）に収録した全町域番号調査表ほか、地元傳承通称名を用いた。遺跡名もほぼ同様の方法でおこなったが、このほか屋号も用いた。

6. 現存する出土遺物についてはできるだけ保管者名を記した。

7. 本年度の調査は、昨年実施した鍋山地区において一部未完成であった禅定寺周辺を中心、大字里坊、大字殿河内、大字乙加宮を再踏査したものである。したがって各遺跡は、これまで報告されてきた『遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』（1988年1月）『遺跡詳細

分布調査報告書II』（1989年3月）『遺跡詳細分布調査等告書III』（1990年3月）と重複するものもあることをあらかじめことわっておく。また、本報告書は、これまでの一連の三刀屋町の『遺跡詳細分布調査報告書I～III』の分布地図及び、遺跡一覧表を掲載することにより、三刀屋の遺跡の完結編としての性格を持つものにした。

8. 調査にあたっては、江角萬市、天喰義富、飯塚一郎、矢田重義、太田 実、市場一正、森田 稔、小林清美の諸氏に同行協力、助言を賜った。また地元鍋山地区の皆様には、多人なる協力を賜った。記して謝意を表明する。
9. 本文は調査指導員と県教育委員会文化課の助言を得て板垣が執筆した。遺物整理及び作図、製図、写真撮影は県教育委員会文化課の協力を得て主に板垣が行ない、小林清美的協力を得た。
10. 本書の分布図と一覧表に掲載した遺跡の大部分は、分布調査による地表面観察によって発見したものであり、埋蔵文化財はその性格上分布調査によってすべて網羅することは不可能である。したがって将来、空白地にも埋蔵文化財が発見される可能性がある。

目 次

序

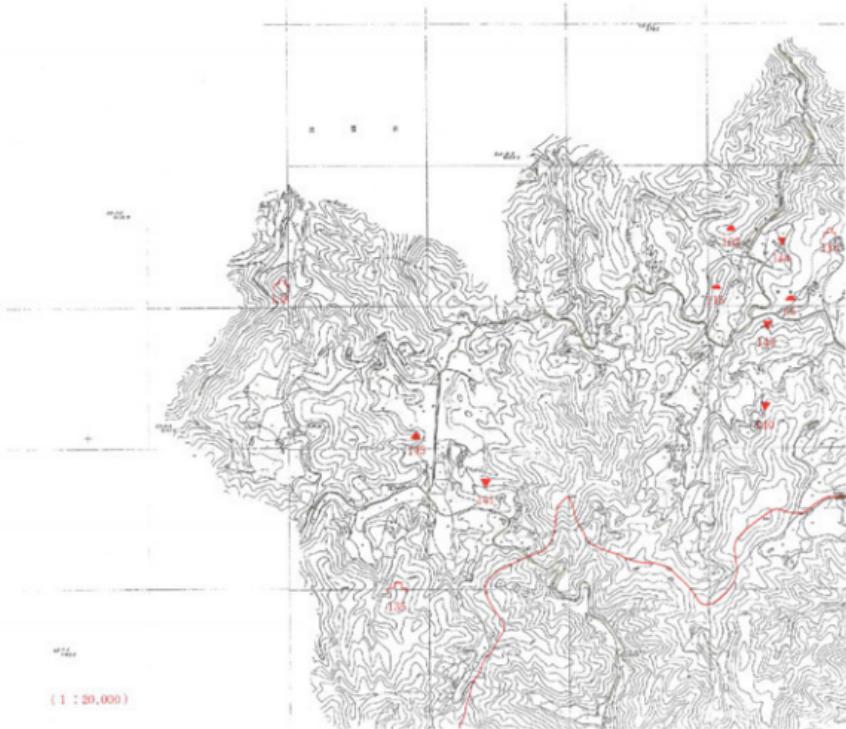
例 言

遺跡分布図

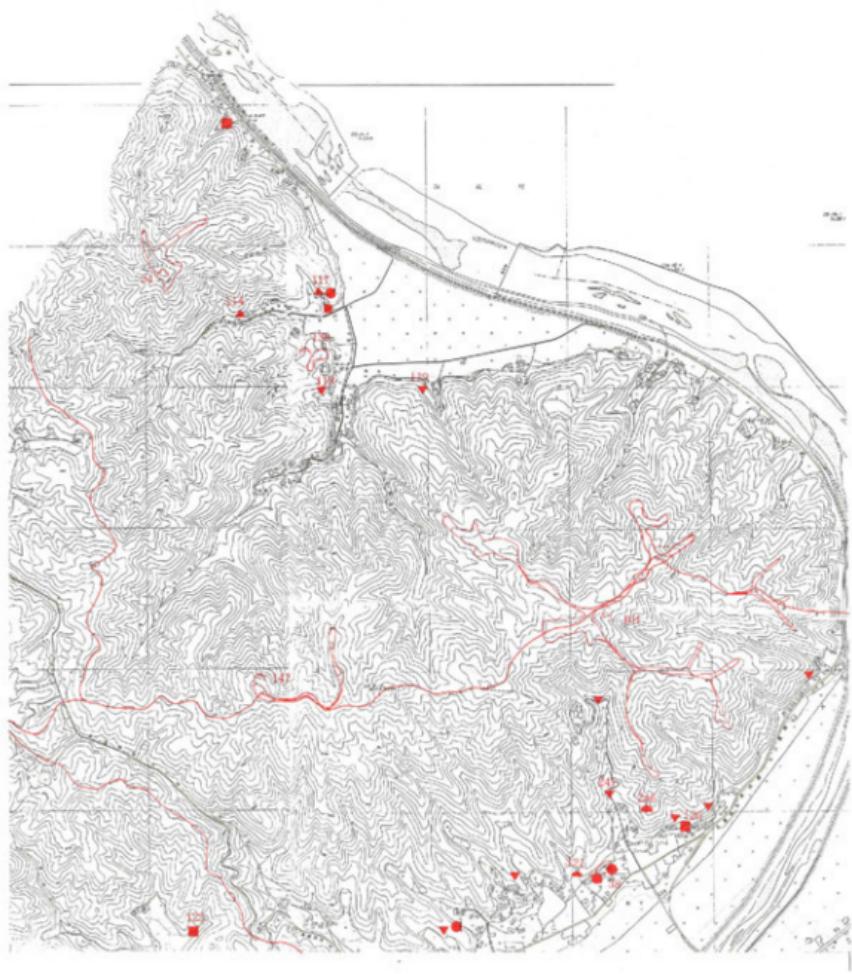
遺跡一覧表	1
位置と環境	10
各地域の遺跡と概況	11
大字里坊	11
大字殿河内	12
大字乙加宮	15
小 結	24

三刀屋町全図



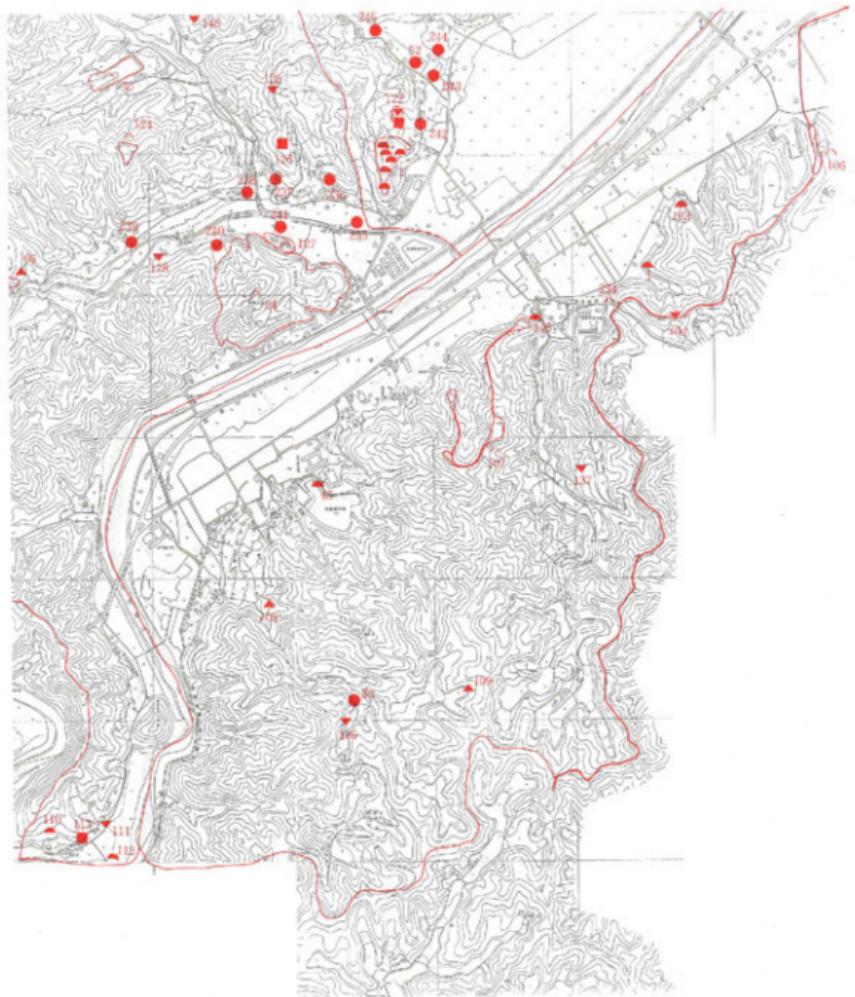


(1 : 20,000)



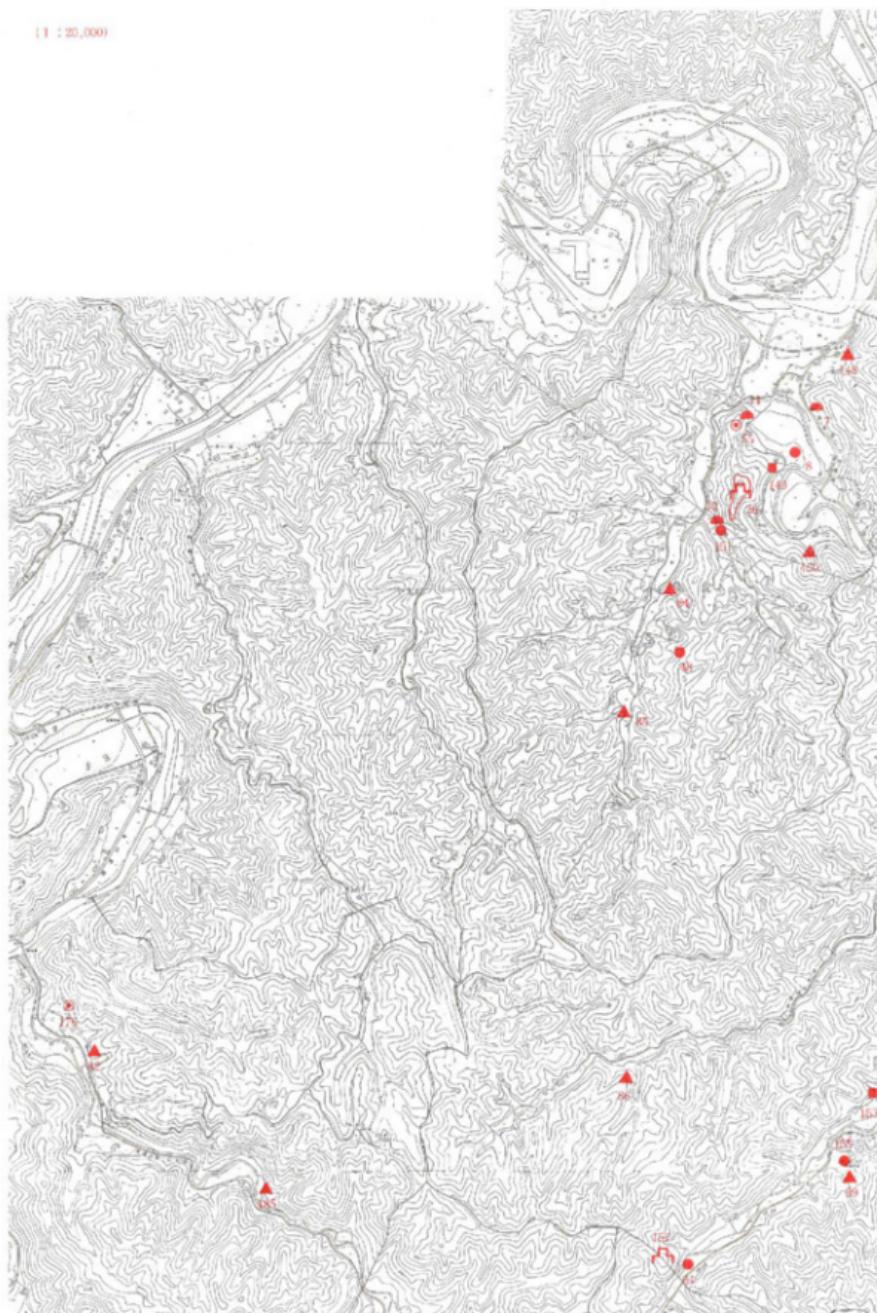


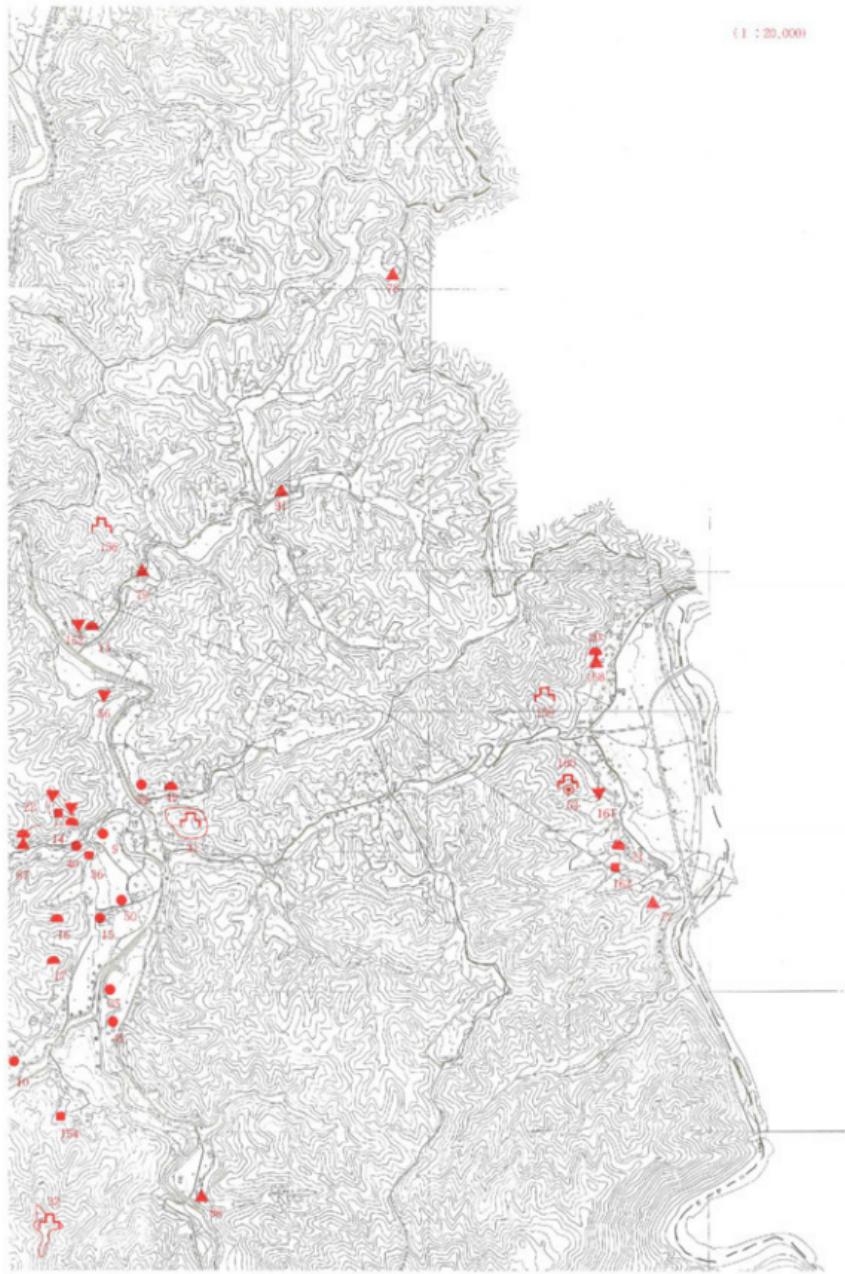
{ 1 : 20,000 }

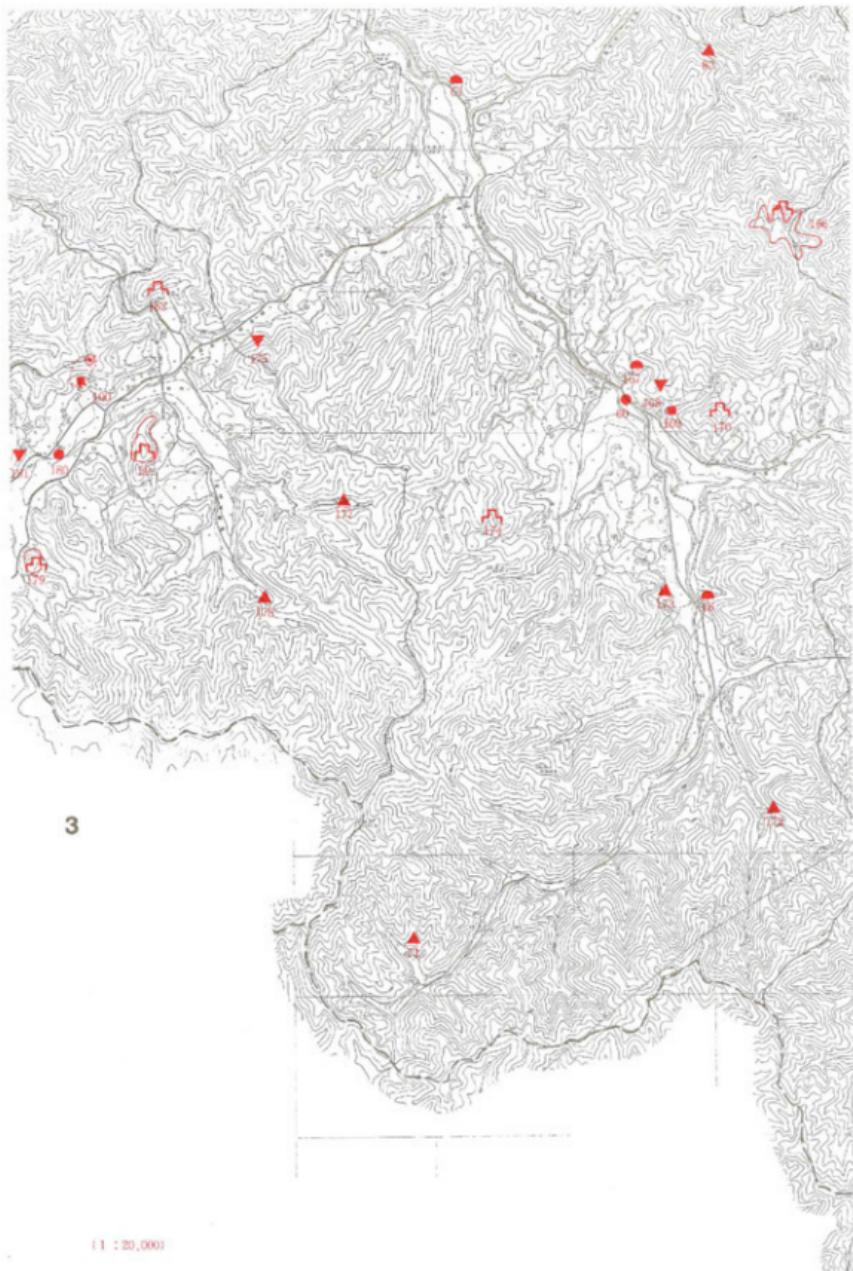


(1 : 20,000)

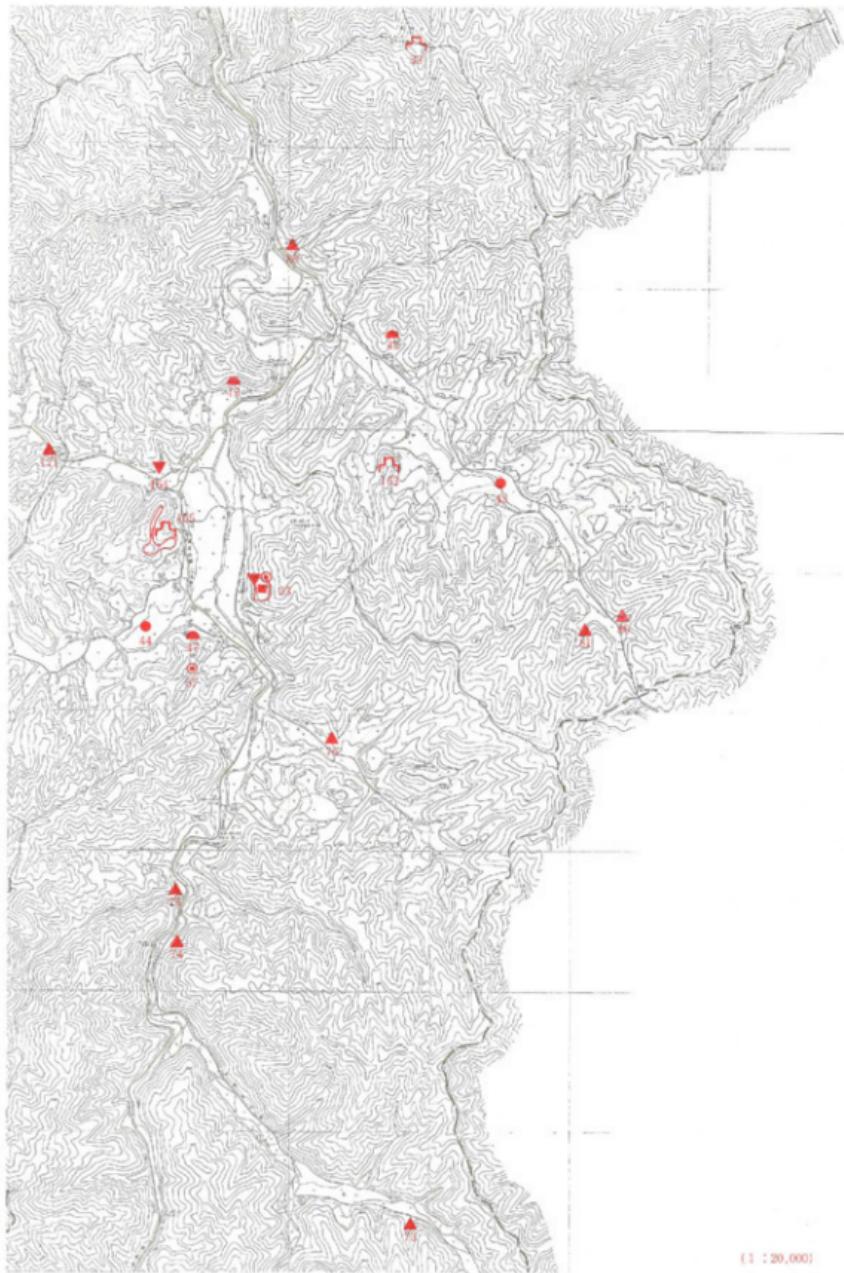
(1 : 25,000)





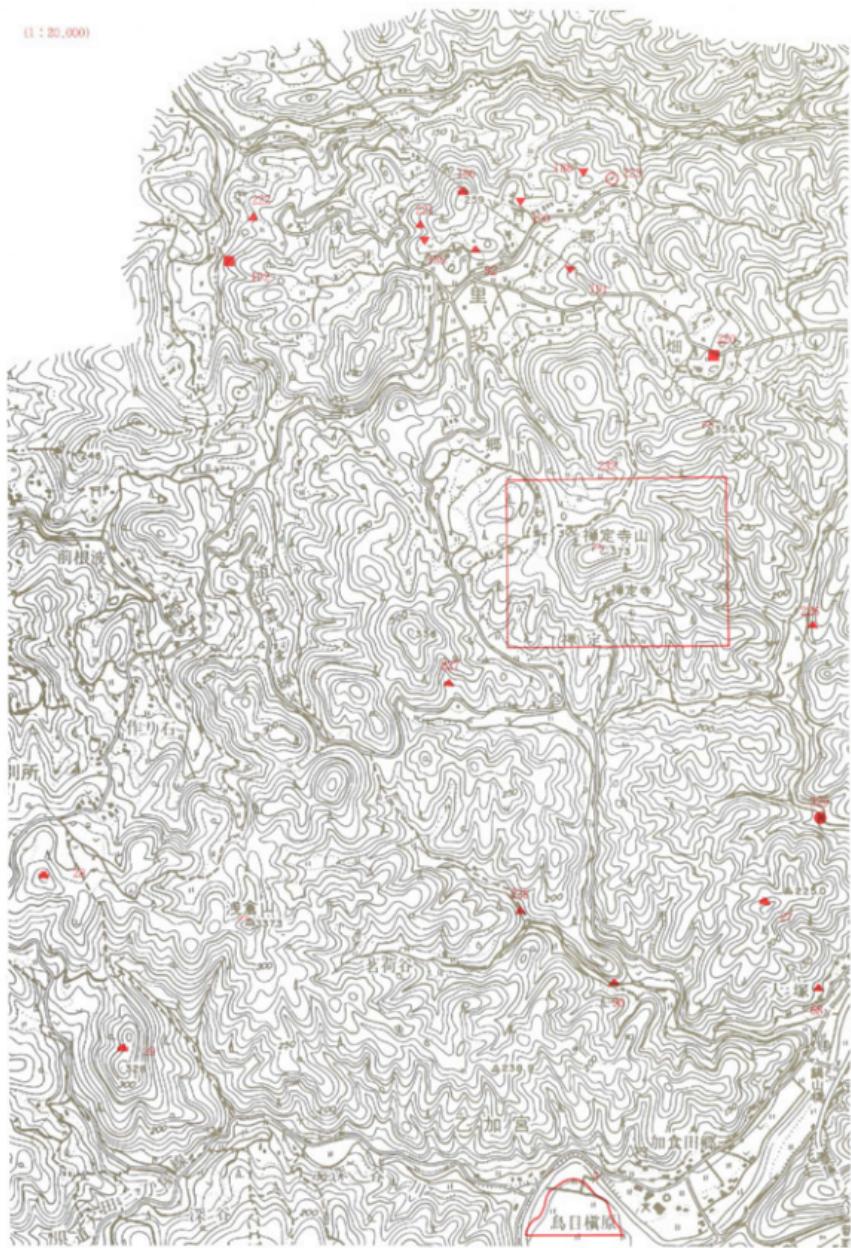


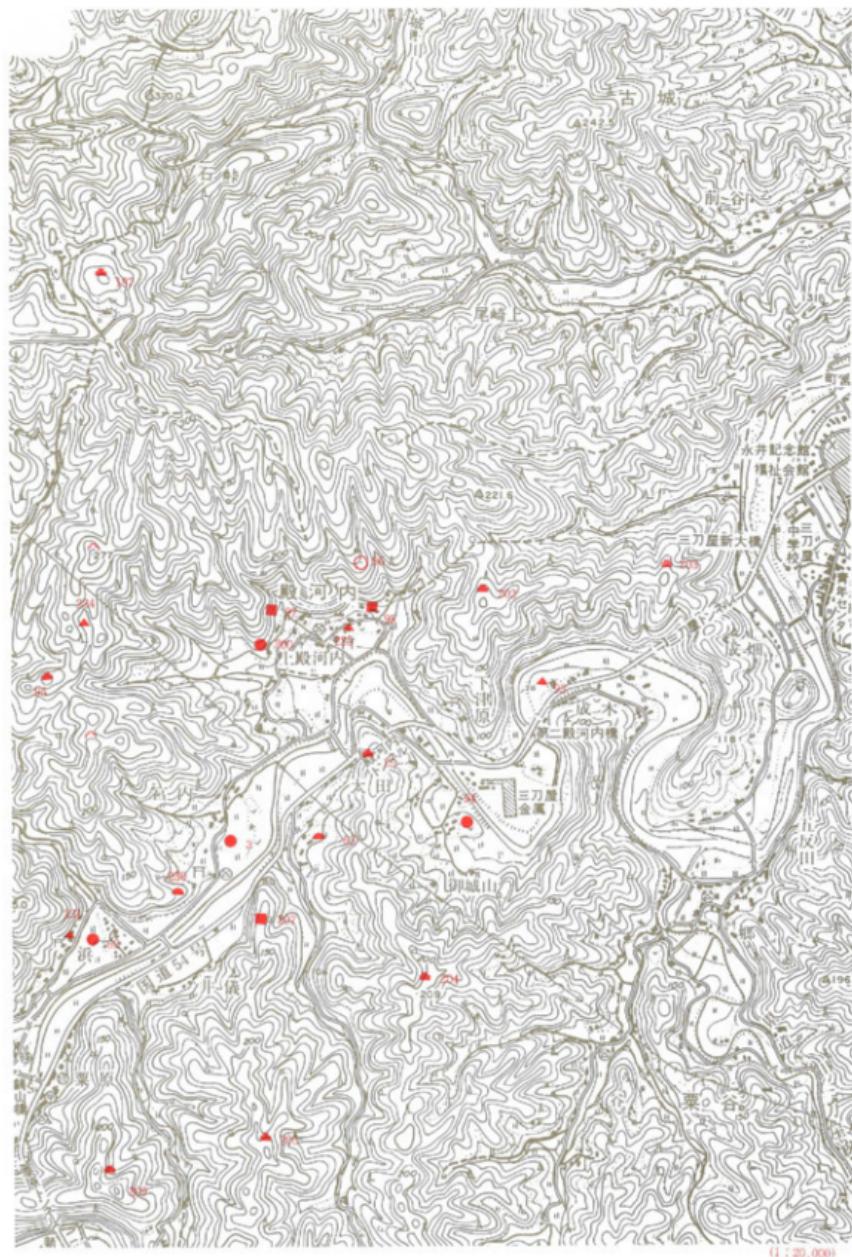
3



(1 : 20,000)

(1 : 20,000)





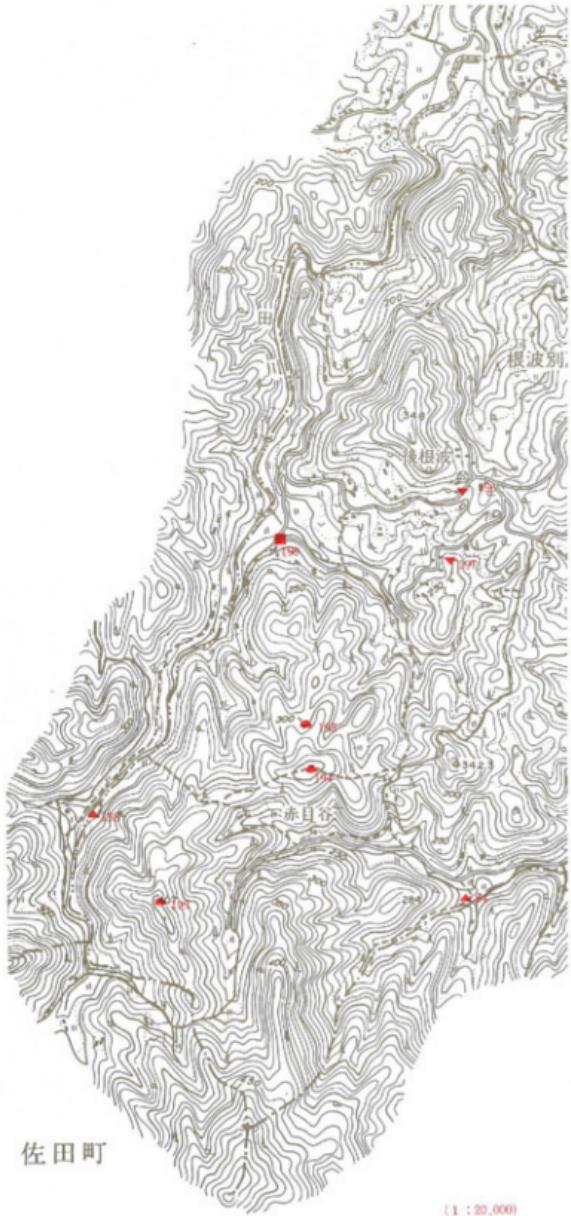




掛

合

町



(1 : 20,000)



(1 : 20,000)



(1 : 20,000)



(1 : 20,000)

三刀屋町内遺跡所在地一覧

伊 葦

番号	種 別	名 称	所在地及び小字	現 況	遺 跡 の 概 況
34	城 堤	伊 葦 城 遺 跡	三刀屋町大字伊豆67他	山 林	山頂付近削平段あり
139	"	堤 / 内 堤	" 895他	"	丘端部に削平段と切妻あり
118	古 墓	鰐 屋 古 墓	" 466	墓 地	大型五輪塔を含む古墓群
119	"	中 屋 谷 古 墓	" 287	"	五輪塔墓群25基分以上墓石集積
114	生 産 遺 跡	佐 谷 たら 跡	" 562	畠・宅 地	宅地により半分消滅。鉄滓散布
117	生 産 遺 跡 生 座 遺 跡 遺 物 敷 布 地	鐵 治 里 遺 跡	" 571他	宅 地・山 林	宅地付近に鉄滓焼石上方山腹で古陶出土

給 下

38	遺 物 敷 布 地	大 門 口 遺 跡	三刀屋町大字給下大門1329 北垣内1315	畠 地 田・県道	大門、石斧出土。北垣内須恵器片散布(W期)
52	"	宮 谷 遺 跡	" ?	畠・県道	(消滅か。位置特定不能)
2	古 墓	松 本 古 墓 群	" 1726他	山 林	1号墳、前方後方50m、S38堀柵調査 2号墳、円・径10m未満、頂部に大仙碑あり 3号墳、前方後方壇・径50m未満。頂部に五輪塔等あり 4号墳、小墳S38堀柵調査。横穴式石室 5号墳、円墳か径10m、五輪塔20基以上(本塚の上) 6号墳、(破損か) (梅窓院墓地) 7号墳
6	横 穴	一 宮 横 穴 群	" ?	?	{桑園造成により消滅か。位置特定不能}
121	"	坂 中 横 穴	" 1332	山 林	崖面に2穴在ったが、ほとんど消滅
101	城 堤	寒 寺 山 要 塚 群	" 1505他	山 林	I~V群より戻る尾根上に連なる郭群、拠点は峰寺 I群=峯寺上最頂部削平段約300m II群=中屋谷上の尾根に削平段約250m III群=三田原上の尾根に削平段約400m IV群=蛇ノ谷北尾根上に削平段約300m V群=蛇ノ谷南尾根上に削平段約500m 寒寺=じゃ山間の尾根路とその間の物見郭 地名伝承の社地。付近に古墓散在
142	"	宮 香 上 墓・古 遺	" ?	山 林	寺跡と隣接の大型宝篋印塔群
120	寺 社 遺 跡	石 宮 跡	" 1570他	畠	寺跡と隣接の大型宝篋印塔群
古 墓	給 下 の 賤 様 墓	" 785 ?	畠		
寺 遺 跡	と 同 安 寺 遺 跡	" 779	畠		
散 布 地	同 安 寺 遺 跡	" 829-3	畠	土師質土器系切り底部片1点	
"	龍 王 遺 跡	" 861	畠	土師器片3点	
"	上 給 下 遺 跡	" 868	畠	須恵器杯片1点、土師器片1点	
"	高 九 遺 跡	" 915	畠	須恵器高杯片1点、泡1点	
古 墓	若 宮 古 墓		山 林		
古 墓	寒 寺 石 塔 群		山 山		

高 窪

遺 跡 番 号	種 别	名 称	所 在 地 (小字)	現 況	遺 跡 の 概 況	遺 物 保 管 者
65	古 墓	後 谷 古 墓 群	蓮 池 向	山 林	1号墳右側あり・方墳 消滅 2号墳5%残存・円墳 3号墳未掘・円墳 このほかにもあるか?	

102	#	苗代追古墳	苗代追	#	丘陵上円墳1基 直径6m	
115	#	蓮池古墳	蓮池	1403	丘頂に土基、5.5×4mの円墳か 五輪塔蓋積	
116	城	堀古山砦跡	古山	竹林・他	3段あり 80×40m 七や山城跡関連の砦の一つ	
135	#	古以後砦跡	古以後	山林	4段と付属小平面 居館跡か	
138	#	竹ノ内砦跡	竹ノ内	山林	30×15m 貿易な物見出曲輪	
140	古墓	蛇ノ原宝鏡印塔	蛇ノ原	原野	田路沿い狹塔 中世後期 體に繩文石亘あり	町教委
141	#	井の追の五輪塔	井の追	山林	丘陵上の旧路沿い 3基以上あり	
143	#	豊の内古墓	豊の内	#	墓地の上にあり 磐基分の石塔片あり	
144	#	段家の上古墓	段家の上	堆・雜	台地の端 マウンド上に五輪塔2・宝鏡印塔1 やや古いか?	
145	製鉄遺跡	屋内鍛冶屋製鉄跡	鐵治屋	926	宅地・畠 カジの他にも有? 鉄津散布 付近鉄穴流し跡も	

古 城

番号	種別	名 称	所在地及び小字	現況	遺 跡 の 概 况
110	古 墳	宮上ミ更神塚古墳	三刀屋町大字古城1443	山 林	円墳径10m未満、梵神木に祝奉納
112	#	椿平梵神道跡	#	1370 ? 田	元石積荒神、圓場で消滅。須恵器多
24	城 堀	三刀屋尾崎城跡	#	1165 他	三刀屋氏撫城、400×500m、県史跡
30	#	元星敷城跡	#	383 他	館後背城郭、40×80m、諏訪郡氏
58	#	三刀屋ちや山城跡	#	1791 他	独峰頂部1ha歓樂切岸天水池等青石中世陶
124	#	中山砦	#	1882 他	簡易な物見部
132	城 堀	大谷堀	三刀屋町大字古城	社 地	丘筋の物見部約100m
134	#	鍾羅堂堀	#	山 林	面田上尾根に削平段4段あり、見張看か
127	船推定地	御歳前船推定地	#	1113 宅 地	城山南麓、鶴駒か、地中に石壙が残っているとの事
113	寺社跡	成木八幡宮跡	#	1367 山 林	明治末年まで在った八幡宮跡。50×80m
123	#	梅窓院正跡	#	1976 山 林・他	寺跡は漸に耕作化している、山裾に小段あり、墓地か
126	#	古城八幡宮跡	#	2031 山 林	八幡宮跡伝承地、付近に古墳あり、30×100m
111	古 墓	成木宮前石塚	#	1354 田	水田中の石積塚、鐵刀片出土の伝承あり、1×1m
125	#	久円寺上古墓	#	120 畑	石垣基壇2×11m、五輪塔、宝鏡印塔、無縫塔等
128	#	松便垣古墓	#	1082 畑	畑地に石積塚が点在、柴安寺跡推定地の裏地帯
129	#	尾崎神子ヶ崎古島	#	1002 畑	石積塚が点在。三刀屋縁りの塚であるとの伝承あり
130	#	枝の前古墓	#	671 雜	五輪塔8基以上が集積
131	#	石曲り美古墓	#	1795 山 林	集石塚や祭祀跡? も、銅鏡(洪武通宝)や刀片出土
133	#	面田上古墓	#	797 ? 墓 地	五輪塔片あり
146	#	堂床古墓	#	1986 ? 山 林	石を葺めた墓壇あり、梵字を刻む宝鏡印塔片あり
66	生産遺跡	金保鋤	#	559 地	馬道、耕地等の整備に勞し鉄滓出土。付近にカジ跡の壘と伝える古塼(五輪塔)あり、地名"金保"
67	#	鉢谷鋤	#	933 田・他	かつて鉄滓が出土。現在は道敷及耕作地化している
233	寺院跡	石咲櫻現跡	#	72-4 田	乙加宮禪定寺北の大門跡
235	散布地	引地遺跡	#	83 畑	須恵器壺片3点
236	#	八万坊遺跡	#	156 畑	須恵器壺片2点、糸切り底部片(奈良時代以降)1点
237	#	中星垣内遺跡	#	450 畑	須恵器壺片1点、須恵器片1点
238	#	コン屋垣内遺跡	#	450 畑	土師器片4点、土師質土器片1点
239	#	丸山遺跡	#	524 畑	須恵器高台付き木不片(歴史時代)1点

240	田	答屋谷遺跡	1107-2	畠 相	須恵器破片1点、時期不明2点
241	田	御藏町遺跡	1114		土師質土器片1点、時期不明2点

三刀屋

53	遺物散在地	庵谷遺跡	三刀屋町大字二刀屋700 他	山 林	山崩れ災害で出土、石斧、土器片等
45	古 墳	官 所 古 墓	宇井ノ谷1611	山 雜	円墳直径約10m前方2/3が倒壊。かつて付近にもあったとの事
1	後 穴	要宮塚穴群	1245 他	山 林	疊崩れに伴し須恵器出土、遺構未確認、消滅、須恵器、勾毛
103	・	要害宅裏横穴	1253	宅 地	宅地裏堤面に1穴残存、付近にもかつてあった、須恵器等Ⅱ期
105	・	地 王 横 穴	1316	雜	後崩れに須恵器出土、遺構未確認、消滅、発達、杯形器期
106	城 壁	裏 塞 背	二刀屋町大字下熊谷 ?	山 林	数段の削平があり、先端部は土砂積堤で構成
107	・	三谷看群 I	三刀屋町大字二刀屋1571 他	山 林	字地丸から字三谷、丸ノ谷へかけて1~3群の小削平
		II	1579 他	II	II群が尾根上に連なる、全長800m
		III	1574	II	
104	古 墓	要害の首塚	1282	雜	後線上の削り出し一角形マウンド、地主神の戦いの死者の首冢と伝う
136	・	庵谷古墓	702	山 林	宅地裏~山腹に埋没していた五輪塔、宝鏡印痕片の集積
137	・	三谷古墓	1350 他	雜	現記船塚、庵地に隣し、五輪塔をまとめ復旧したこと。
108	生 慶 露 露	貴原野谷たたら	1636 他	雜	地名跡、小谷入口付近鉄滓散布地、現在埋め立てて畠地、50×70m
109	・	庵谷燒山たたら跡	764	田 地	谷奥深い支谷部、鉄滓散もありとの事、現況荒廃水田
234	舊 路	地 王 野 路	1288-5 他	宅 地	尾子、毛利の撤戦地

栗 谷

道路番号	種 別	名 称	所在地(小字)	現 況	遺 墓 の 概 况	遺物保管者
8	散布地	米 谷 濱 路	向 山 水 田	開墾~古墳時代、岡場で土器・石器多数出土	重富福太第	
48	・	かいろく遺跡	かいろく	山 林	土 墓	中学校?
151	・	城ノ尾下ノ段遺跡	下ノ段 202	樹	七尋山七尾 横穴か	町教委
7	横 穴	栗 谷 横 穴 群	掛ノ前	山 林 , 他	古式土師片出土、部分発掘で柱穴等	町教委
11	・	大 年 横 穴 群	大 年	山 林 , 造	A群3穴 B群1穴 栗谷神社の下、上にあり	
12	・	栗 谷 横 穴	城ノ尾	水 田	遺路法穴に2穴あり 未発	
26	城 壁	栗 谷 城 路	城ノ尾	山 林	地にも有か?	
84	製鉄遺跡	金 井 予 鉄 路	金 井 子	水 田	水田造成で消滅	若規栄
85	・	城 本 谷 鉄 路	城 木 谷	水 田	山域 200×25m 斧へ下降する郭階破損	
148	・	不 動 堂 鉄 路	川 木 谷	水 田	天文年間?	
150	・	カナクソ 鉄 路	カナクソ	水 田	鉄滓散布 20×20m 鉄地造成で破損	
					時期不明	
					のろ火運あり 工事で消滅か 近世	
					丘陵台地にあり 12×10m 鉄滓散布	
					芦材スサ入り	
					山脚部 水田法に断面がみられる	
					芦材スサ入り	

149 35	法 尺 寺 跡 大 年 経 墓	法 尺 寺 年	山 林 地	寺跡であろう 小堂 五輪塔あり ・右経塚 墓塚中央にあり	
-----------	--------------------	---------	-------	---------------------------------	--

多 久 和

9 敦布跡	宮 田 遺 跡	宮 田	水 田 · 史跡公園	彌文時代の墓地等 検掘他土器・瓦器等新定 他に古墳時代住居等	町 教 委 重富福太郎
10 番落遺跡	上 口 遺 跡	番 口 遺 跡	水 田	遺場工事で礫石判あり 土器出土 消滅	
15 故台池	古 故 遺 跡	古 故	水 田 · 権地	鐵石小学校付近 彌文～中世各期 中世鉄跡も	町 教 委
35 ハ	鐵石神社遺跡	鐵石神社	社 地	須恵器湖出土	重富福太郎
39 ハ	大神谷遺跡	浮 森	畑	弥生上器片? 出土	重富福太郎
40 ハ	森谷川遺跡	谷 川	川・畠・田	彌文～弥生器物多数 (環状石斧、磨石斧、石劍他)	重富福太郎
41 ハ	鐵石神社上遺跡	京 雨	神社飛地	須恵器断片出土	重富福太郎
50 ハ	京殿遺跡	京 雨	水 田	石斧・繩文・須恵・土師片多数包含 圓場で消滅	重富福太郎
51 ハ	無谷川聚落跡	無谷川原671	宅 地	石斧2点出土	重富福太郎
156 ハ	渕舟遺跡	湯 奇	水 田	勾玉・須恵器片出土 (消滅した横穴か?)	宮崎耕枝
13 横穴	大倉口横穴群	大 會 口	山 林	2穴あり 2号穴消滅か	
14 ハ	森谷横穴群A群	森 谷	ヲ	3穴あり 1号で須恵器・环・壺 3号未探	重富福太郎
		B群		1穴 メノウ勾玉 刀子 須恵器片 入骨出土	
16 古 墳	古 墓 古 墳	古 墓	ヲ	丘陵端 円墳 径7m 墳頂に石あり	
17 ハ	古殿今宮古墳	今 宮	ヲ	丘陵端 円墳 径7m 墳頂に石あり	
49 横穴	大神谷横穴	大 會	私 遺	1穴 消滅 須恵器片出土	杉原栄次
31 城 砦	多久御城跡	城 ノ	山 林	100×120m 丘山城 1～7連郭式 土塁・堀切有	
32 ハ	福 谷 城 跡	福 谷	ヲ	山頂の城 500×300m 3支郭群22郭 堀切・土塁	
33 ハ	高瀬山城跡	小 原 答	ヲ	山頂の物見櫓か 削平面 15×35m 単郭	
156 ハ	梅坊若(寺院跡)	梅 坊	山 林	大盛地区の下口の城戸若か 寺院跡も	
157 ハ	福谷甲原上野跡	福 谷	山 林	丘頂 20×15m 整理～土塁のみ 見張り台か	
56 古 墓	清名五輪塔群	古 寺	ヲ	多久和の下口城戸 塔姿良好約30基 寺跡も?	
152 ハ	大倉口五輪塔	大 倉 口	ヲ	古墓か 塔片が埋没していた	
78 製糸遺跡	長戸呂谷紡跡	長 戸 吕 須 谷	ヲ	鐵津散布地 遺場で消滅か	
79 ハ	道の下鉢跡	道 の 下 鉢	道	鐵津散布 上方に炉床残存か	
86 ハ	桶ノ谷鉢跡	桶 / 谷	山 林	鐵津あり 段地形は炉床か 近世?	
87 ハ	森谷鉢跡	森 谷	ヲ	鐵津・炉壁片 (スサ入り) 石造の金屋子神祠に初見	
88 ハ	小原鉢跡	小 原	山 林 道	野だたら? 金屋子神木あり 遺傳残存か	
91 ハ	大日鉢跡	大 日	ヲ	鐵津散布	
99 ハ	湯舟鉢跡	湯 舟	ヲ	鐵津散布 金屋子神木・無縫革あり 近世谷奥で寺跡は崩壊 近くに堂あり	
22 寺院跡	法泉寺跡	法 泉 寺	山 林	印塔・五輪塔	
154 ハ	正寺跡	正 寺	ヲ	付近に堂あり 小鏡に銘あり	
153 ハ	瑞託和神社跡	瑞 泉 寺	ヲ	ほとんど廢墟 付近に古墓あり	
36 神社跡	託和神社跡	宮 ウ 子	山 林	明治44年鐵石社へ合祀 石段等残存 板地70×50m	

上 熊 谷

		古 墳	岩 庄	古 頃	岩 庄	古 頃	地	備	数 委
20		古 墳	岩 庄	古 頃	岩 庄	古 頃	地	横穴式石室 横惠昌・南朝 馬具・鎌・刀子 出土	
21		横 穴	善 王 寺	横 穴	善 王 寺	古		水害で発見 消滅 横惠・刀子出土したとのこと	
160		城 壁	上熊谷蛇山城跡	蛇 山	山 林			丘陵端 200×60m 6郭 塙切 主郭に軒濠有	
159		。	上熊谷秋葉山堀跡	中 村 奥	境 内	山 林		武集社を祀る 2段あり 物見台	
161		古 墓	木 道 草 神 古 墓	林	荒 神	塚		丘端の塚 五輪塔 宝入室蓋印塔	
77		製鉄遺跡	後 の 谷 鋼 路	後 の 谷	由	林		谷間の小テラス 若干の鉄滓を認む 遺構不明	
158		。	岩 庄 製 鉄 遺 跡	岩 庄	古 地	地		小さな鉄滓が若干散布 遺構不明なるも鉄特 である	
162		守 寺 墓	善 王 寺 墓	善 王 寺	荒 地	地		18×25mの削平地 かつて觀音堂・積石墓あ った	
54		新 家	熊 谷 山 畜 塚	蛇 山	山 林			蛇山城跡主郭東部にあり 雲泉寺に関係か	

神 代

43	放 石 地	神 代 川 原 通 跡		沙 子 田	山 林	?	石岸出土地(現地確認不能)		
42	横 穴	神 代 横 穴		砂 子 田	山 林・林道		1穴 横惠昌期 丹達土師器出土	小田定雄(町寄託)	
163	城 壁	神 代 備	尚 免 470	庄	林		丘陵端 主郭と4段の付属曲輪 物見台か (現地確認不能)	高 尾 繁 延	
80	製鉄遺跡	し ょ う う ぶ 鋼 路	し ょ う う ぶ	?	地		谷間の呂岱地 鉄洋・炉材片散布 遺構残存か		
81	。	神 廻 鋼 路	神 廻 鋼 路	草	地				

六 重

44	放 石 地	西 六 重 横 穴		烟	水 田		水田地帯か 横惠昌出土土地という (現地確認不能)		
19	横 穴	六 重 横 穴	大 壁 屋	山 林			穴叢苔の石組みあり はたして横穴か 河惠昌系合田期 1穴のみか 建没		
47	。	六重敷石神社境内横穴	大 壁 屋	内 地			馬路形の尾根上に3群の石配置 200×170m 土壁・豈壁・堀切り	六重敷石神社	
165	城 壁	六 重 城 路	蛇 谷	山 林			北入宝蓋印塔1付近に「穴地蔵」の石組み あり		
164	古 墓	赤 東 古 墓	赤 東 54	煤			(現地確認不能)		
72	製鉄遺跡	鳥 越 鋼 路	鳥 越	水 田	田		斜面に鉄洋散布 上の様に遺構残存か		
73	。	奥 山 草 鋼 路	奥 山 草	水 田	田		道路沿いの斜面に鉄洋散布		
74	。	真 砂 谷 鋼 路	奥 山 真 砂 谷	茶 园	園		丘陵端 70m以上鉄洋散布		
75	。	金 藏 鋼 路	金 藏	水 田	他		近世の大型歩道か (現地確認不能)		
76	。	栗 谷 鋼 路	栗 谷	?	地		広大鉄洋散布 大量冶も併存か 大部分は消滅か		
89	。	六 重 大 鋼 治 直 鋼 路	大 鋼 治	屋			150×50m 削平地2段 一石絆塀 五輪塔・宝蓋印塔あり		
23	守 寺 墓		金 桑 寺	茶 园	山		石碑・上御賀上路 鉄貨 鉄片出土 消滅 中後の修法塚か		
57	祭祀遺跡	策 直 古 墓	策 直 古 墓	田	煤			須 山 伊 三 郎	

(他に六重地内出土とみられる石器(磨石・叩石・石斧・石棒)あり。——子安觀音堂・須山優保管)

中野

60 散布地 横穴	紙室 々々々々	墨 遠 模 穴	紙 堂	居 々	水 山	田 林	須恵・土師片出土 崩れて埋没 2穴か 須恵器類の壺・杯・碗 耳環	正 正	藏 藏	場 場
18										
61	〃	東下谷 横穴群	東下谷	道 路 法 面	1~6号穴 1~3号は古く開口 4~6号人骨・須恵器類・瓦期 月・玉蝶			町	委	委
167	〃	正處坊 横穴 城 墓	紙 堂	烟 山	1穴 崩壊 須恵器類 壺・妻片			正	藏	坊
174	〃	金々蛇ノ追跡 中野鳥巣ヶ丸城跡	紙 北畠・他	山	1号方8.5m 2号近9.0m 尾根上にあり					
156	〃				山脈の本城 300×200m 5支郭群より構成 合計67郭あり 南側に籠館あり					
170	〃	トチノ木 路	紙 屋	山・竹林	丘陵端 烟路形に小郭を配す 鳥巣ヶ丸城 出張砦					
168	古 墓	向光寺 古墓 比久尼塚	紙 西 下 谷	烟 山	宝蓋印塔残欠 下方に甕あり 五輪塔2・宝蓋印塔片 仏寺跡の焼続き					
175	〃				近世?					
71	製鉄遺跡	草々々鉢跡	立々々	湖(荒廃)	30×20m 鉄滓多量壁種 錫大塊あり 明治初年まで					
83	〃	中野杉谷野鉢群	東下谷杉谷	水 田	(運場整備により現地確認不能) 戸壁材スサ入り					
171	〃	六重鉢 鉢跡	紙 屋 233	烟	7×15m 鉄滓・炉材(スサ入) 多数散布 中?					
172	〃	業々々向谷鉢跡	業々々	山 林	開場水田の下に鉄滓あり					
173	〃	中野竹鉢跡	紙 屋	烟	床面に鉄滓堆积 遺構不明					
169	寺院跡				丘陵端 40×25m 煙から礫石(径17cmの柱 穴)出土			永井政吉		

須所

180 散布地 須所	須所土房遺跡 須所八幡山城跡	土 居	烟	畿高台地・須恵・土師器細片散布 独立墳丘墳 200×100m	町 教 委
59	城 墓	中山865-866	山 林	主郭・付属曲輪・土塁・他	
179	〃	志源京岩跡	志 源 京	小丘陵端 50×50m 墓3・堅堀13本 後背部消滅	
182	〃	城ノ谷岩跡	城 ノ 谷	丘陵端 100×50m 墓切2・郭2以上 道で被損	
181	古 墓	折屋垣内古墓 堤尾新跡	折 屋 垣 内	旧荒神塚 道路で消滅 五輪塔残欠	
177	製鉄遺跡	堤尾西平	水 田	かつて鉄滓散布 道路・園場で消滅か	
178	〃	奥山本谷鉢群	奥 山 本 谷	谷間の奥3カ所あり 鉄滓・炉材多数散布	
100	寺院跡	寺 床	烟 山 林	60×80m 硫石列・碑 背後上に石絆塚あり 法事宗本坊として著名	

坂本

183 散布地 坂本宮ノ前遺跡	宮 ノ 前	烟	20×20m? 上師器片 鉄滓もあり 内容不明		
82 製鉄遺跡 松杉谷鉢跡	松 杉 谷	荒 煙	20×50m 鉄滓・炉材多量散布 近傍の大型鉢跡か		
185	〃	松杉谷鉢跡	鉢 床	30×40m 丘陵台地 鉄滓・炉材散布 野鉢様式か	
176 禁祀遺跡 瓜ノ下荒神塚	瓜 ノ 下	山 林	石碑・錠大袖・土師質七器・宗銭出土・消滅	渡部精義	

184	祭祀遺跡	的場積石塚	鶴林洞?	?	丘陵最頂部 6×12cmの集石(川石)塚矢の 的と伝う	
219	城 墓	南偏城跡	高 棚	山林・竹林	200×100m 郡 横切	

里坊

遺跡番号	種別	名 称	所在地(小字)	現況	遺跡の概況
186	城 墓	高城城跡	高 墓	山林・竹林	山頂に郭(鉢跡) (200×200m) 山頂に郭
187	塔	向星聚墓跡	高 墓	山 林	丘陵端、五輪塔5以上、宝鏡院塔2以上の石片
188	古 墓	松濱古墓群	松 濱	草 地	五輪塔1、宝鏡院塔片
189	古 墓	中古墓	中 古	山 煙・山林	五輪塔片、地すべりで流される
190	古 墓	石宮古墓	石 宮	高 墓	宝鏡印塔残欠
191	古 墓	把上古墓	把 上	ノ 墓	法王寺(出雲市)の仁王門跡、礎石
192	寺院跡	法王寺仁王門跡	仁 土	草 枝	初室大正始め頃。最終窓堺和33年頃最盛期従業員10人
92	窓堺跡	蕉園瓦窯跡	中 上	居 水田・漁	
220	寺 路	寺院路	北 上	北 草 地	
221	寺 路	花立十王堂跡	花 墓	煙	西の大門跡
222	古 墓	坂原古夫上山古墓群	坂 原	山 林	五輪塔残片2基以上
223	銭出土地	坂原古夫上山古墓群	坂 原	烟	和銭出土の伝承あり

根波別所

28	城 墓	茶白山城跡	茶 白	山 林	主郭に土塁、郭、營郭、腰郭、天然の大空隙
193	塔	斐赤目谷城跡	斐 赤	日 谷	(300×250m) 郭
194	塔	赤目谷石跡	赤 目	谷	(50×40m) 郭
196	古 墓	大畠古墓群	大 畠	蛇 咲	丘陵先端、五輪塔片と宝鏡印塔片が埋没している
197	塔	道の上五輪塔	道 の 上	五 輪	五輪塔2
64	製鉄遺跡	恩後尻鉄跡	恩 後	尻 鉄	鐵津散布
198	塔	金床鉄跡	金 床	床 鉄	鉄津、新壁材片散布
199	神社跡	御神社跡	御 神	水 田	明治24年に遷座
200	放	佐右衛門屋敷跡	佐 右	衛 門 屋 敷	赤目谷旁のある丘陵の北麓 30×50m

殿河内

200	放 市 地	上殿河内遺跡	上 殿	河 内	水 田	石斧1、須恵器、土師器片	
63	横穴群	太田横穴群	太 田	横 穴	水 田	2穴、須恵器、馬具、鉄斧	
25	城 墓	御城山城跡	御 城	山 城	山 林	(200×100m) 郭 横切	
95	塔	殿河内奥城跡	殿 河	内 奥	山 林・竹林	(200×100m) 郭、腰郭、横切	
202	塔	下殿河内城跡	下 殿	河 内	ソウ 谷	坂	(100×50m) 郭、横切
203	塔	大横山城跡	大 横	山 城	横	(450×100m) 郭、腰郭、横切	
204	塔	高丸看群	高 丸	看 群	九 丸	(1,500×300m) 郭、腰郭、横切	
205	塔	方寺石跡	方 寺	石 跡	岩 石	(600×300m) 郭、横切	
206	塔	陣高丸城跡	陣 高	丸 城	木 谷	(800×500m) 郭、張切	
97	寺院跡	正福寺跡	正 福	寺 跡	宅 地	宝鏡印塔、五輪塔	
98	塔	永昌寺跡	永 昌	寺 跡	烟 谷	延宝年間に開基、淨土宗	
207	塔	方寺跡	方 寺	寺 跡	山 林	詳細不明	
96	銭出土地	清水佐神麻遺跡	清 水	佐 神 麻	山 林	撲納坑2、鉄錠1、刀3、和銛1、土師質土器22、円錐3	
94	住居跡	波河内道跡	波 河	内 道	烟	撲立建物跡480×70m、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、鉄津	
93	廬 路	波河内埴瓦工場跡	波 河	内 嵌 瓦 工 場	荒 地	煙突1、昭和25年頃約5年間操業	

208	製鉄遺跡	札場遺跡	尾錫跡	札場遺跡	尾錫跡	宅地	鉄津散布
224	鉢跡	殿河内美野鉢跡				山林	野野の伝承あり
225	古墓・寺跡	清水亭下堂跡				焼	神定寺東の大門跡

乙 加 宮

3	散布池	宮内遺跡				水田	讃文早期～中世(100×350m)
5	"	橋原遺跡	楓	楓	原	"	讃文早期～讃文後期(150×170m)
62	"	浜遺跡	足	谷	谷	"	讃文早期～中世 磁器土器
4	城砦	平家城跡	崩	山	林	(40×10m)	丘陵頂上に小郭
29	"	朝倉山城跡	谷倉	山林・竹林			山底に郭2
209	"	粟原城跡	焼	谷	"	(500×500m)	郭 掘切
210	"	鳥日城跡	鹿	谷	山林	(1000×600m)	郭 深切
211	"	上乙多田城跡	皆	平	"	(600×200m)	郭
212	"	休場看跨跡	休	場	"	(150×50m)	郭 掘切
213	"	長勝寺跡	本	谷	"	(200×100m)	獣糞をあげた伝承あり
214	"	本谷城跡	本	谷	"	(200×100m)	郭 (虎口1?)
27	城砦	大塚山城跡	ヤ	ア子谷	山	林	近世 鉄津散布
68	製鉄遺跡	金屋了鉢跡	金西	平	荒地		鉄津散布
70	"	こつて鐵鉢跡	銀	水	田		鉄津散布
90	"	紗羅鉢跡	銀	畑	畑		鉄津散布
215	寺院跡	非尾敷通跡	皆	半	畠		(34×12m) 長勝寺の最初の移転場所(近世)
216	"	長湯寺跡	寺	底	山林・竹林		中世～近世? 円通寺の末寺、鰐口出土
217	"	客土寺跡	客	土	土	沼	小章
218	祭祀遺跡	客上寺社段	床	山	林		露出した9×8mの岩盤、乙多出地区的氏神
226	鉢跡	浜奥川鉢跡	保	坪	山	林	鉄津多量に分布
227	古窯	毛利秀麻呂窯跡	深	田	臺地		古窯。大宝二年の銘あり
228	鉢跡	若狭窯跡	艺	谷	山	林	詳細不明
229	散布地	浜奥川石質出土地	浜	田	田	河	石斧1出土
230	古墳	下宵内吉墳	堀	木	山	林	円墳2基
231	古墓	石飛忠良宅横古墓	井手ノ	ノ	上	沼	五輪塔2基以上
232	寺院跡	神定寺下遺跡	堀				坊跡多数

位 置 と 環 境

今年度分布調査を実施した三刀屋町鍋山地区は、現在の大字早坊・根波別所・巖河内・乙加宮の各地区を含み、三刀屋町の西部にあたる。この地域一帯は奥出雲に源を発する斐伊川の支流、三刀屋川の流域であり、随所に肥沃で平坦な段丘地形が形成されており、その段丘上に点々と遺跡の存在が認められる。これらの遺跡の中には縄文時代から人々の生活の場として重要な位置を占めると考えられるものも多い。しかし1980年代にあいついで進められた圃場整備によって多くの遺跡が明確な記録を残さないまま破壊されたことは、まさに残念である。この整備工事の際に発見された遺跡として浜遺跡の縄文土器片の中に、早期後葉の植物織籠を混入したもの（内面二枚貝による条痕を持つものと、ナデのもの）、後期初頭の縄文地に細めの沈線を施したもの（中津式併行か）、晚期の口縁外面下に突帯を貼付け、ヘラ状工具で刻目を入れたもの等が確認されている。また柏原遺跡からは、早期末から前期の二枚貝による条痕をもつものや、中期後葉の撚糸文を施すもの（早木II式）、後期前葉の沈線間に縄文を施したもの（福田KII式）、後期中葉のいわゆる縁帶文土器（崎ヶ鼻式）、二枚貝による条痕調整を施す粗製深鉢形土器等が確認されている。今後の縄文時代を考える上でも貴重な基礎資料といえよう。

弥生時代の遺跡としては浜遺跡・宮内遺跡により中期から後期にかけての土器・石器が出土しているが、遺跡の実態においては定かでないのが現状である。しかし谷水田を中心として小規模ながらにも耕作が営まれていたことが予測できる。

三刀屋町においては各時代を通じ、古墳時代の遺跡がもっとも多い。それに反して鍋山地区では古墳時代の遺跡が少なく、現在確認されている遺跡は太田横穴群、下宮内古墳などである。しかし太田横穴群をはじめ、周辺地区からは多例の横穴が確認されており、今後この地区においても、さらに多数の古墳、横穴の確認される可能性を残すと考えられる。

禪定寺を軸とした仏教文化は、この地において一時期大きく開花したといえよう。七堂伽藍坊宇四十二院をかぞえる大寺院として発展した禪定寺は、その後戦乱の世にまきこまれながら次第に伽藍が縮小していったが、現在も尚、天台宗の古刹としての風格をのこしている。

中世以降、戦乱の世になるにつれ、多くの山城が築かれていたことは、この地が交通の要地として重要な拠点であったこととともに、権力者の勢力確保のための前線基地としての役割をはたしたものと思われる。近年、中世山城研究は全国で見直されており、今後の研究に大きな期待が寄せられる。

各地域の遺跡概況

大字里坊

189 中古墓

禪定寺山の北麓の小盆地である里坊地区の北側丘陵に位置する。飯塚一郎氏宅の後にあたり、五輪塔の宝珠・受花部と塔身の地輪部のセットと考えられるものが確認された。地輪部はやや縦長で梵字を持ち、室町時代の作と考えられる。

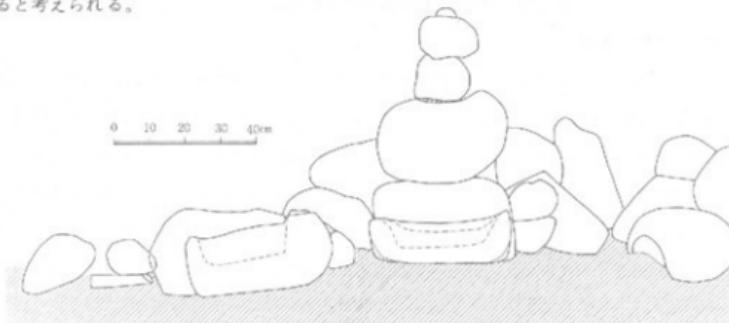
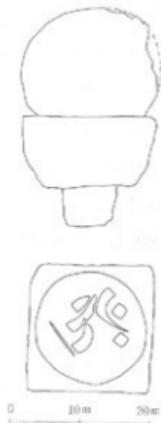
221 花立十王堂跡

古刹禪定寺の寺領の広さをしのばせる三大門の一つである。すなわち西の大門として出雲禪原方面からの玄関口であった。しかし、尼子氏と内内氏との争いの中、数度の戦火にまきこまれ焼失した。現在は大門をしのばせるものは何もないが、この地の伝承によれば、禪定寺に参拝する際、疲れ果てて寺まで辿りつけそうもない者や高齢者が、この地より花を立てて禪定寺山を拝んだことから花立の地名がついたとされている。

222 飯塚正夫氏宅上山古墓群

第7図 中古墓五輪塔実測図

里坊でも最も北側の丘陵地に位置し、ほぼ出雲市と境を接する地点である。古墓群は五輪塔で、塔片からみると五基以上あると思われるが、ある時期に一ヶ所に集められたと考えられ、セット関係については不明である。この地は出雲戸倉城からの伝令を禪定寺に伝えたとの伝承を持つ高城城跡の北西にあたり、この古墓群はこの高城城に係るものであると考えられる。



第2図 飯塚正夫氏宅上山五輪塔実測図

大字殿河内

94 殿河内遺跡

三刀屋町大字殿河内1007番地他に所在する遺跡である。中国電力㈱による水力発電所進入道路の建設に際して確認された遺跡であり、昭和61年度に発掘調査を実施したところ、掘立建物跡4棟（平安期ごろのもの3棟、中世のもの1棟）が検出され、さらにも出土遺物としては古式土師器16片、須恵器23片、土師質土器74片、中世陶磁器17片、鉄滓が確認された。〔注1〕これらの出土遺物はいずれも細片、破片で、現形に復し得るものや、器形等を判断するにはいたらないものばかりのようである。奈良・平安時代から今日に至るまで生活が断続的に及んだ居住区といえ、中世から近世にかけて、御城山城、殿河内奥城といった城跡居住区としての性格も持ちあわせていたと考えられる。

200 上殿河内遺跡

三刀屋川によって形成された河岸段丘上の遺跡で、縄文時代のものと考えられる石斧が出土している。さらに周辺により土師器片と須恵器（第3図）が確認されており、縄文時代から奈良・平安時代にかけての生活居住区であったと考えられる。



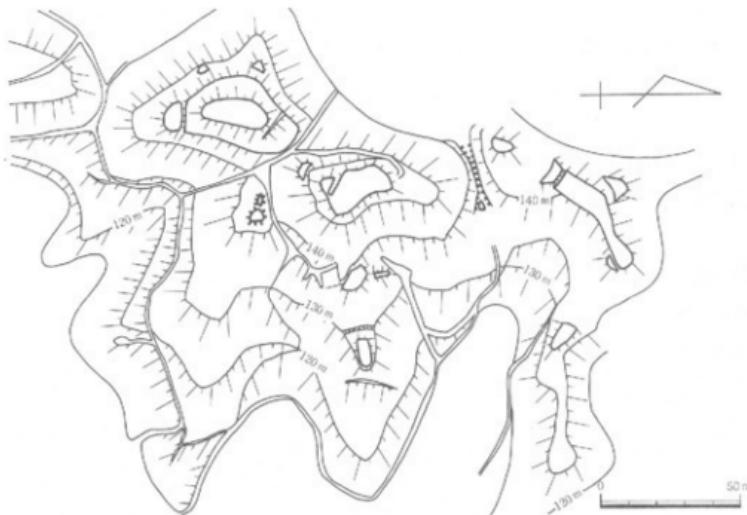
第3図 上殿河内遺跡出土遺物実測図

63 太田横穴墓群

三刀屋町大字殿河内太田で三刀屋川の右岸に位置する。圃場整備事業に伴う作業道新設工事中に偶然発見された遺跡で、昭和57年度に発掘調査が実施され、横穴2基の線密な報告がなされている。主な出土遺物は1号穴より完形品の高杯が3点、2号穴より蓋杯が10点、完形品の平瓶が1点、甕片が2点、さらに鉄片、刀子、馬具類（くつわ、鋏具）、耳環が確認されている。構築時期は出土した須恵器から、概ね古墳時代後期に該当し、7世紀前半に造営されたと考えられる。この太田横穴群は古墳時代遺跡としては鍋山地区で唯一の横穴墓として知られており、殿河内の各段丘上の水田を生産基盤とした集団の長のもとのと考えられる。

25 御城山城跡

現存のR54号線殿河内トンネルが作られている丘陵の突端部に位置し、標高154.7mを測る。昭和60年度に実測（一部略測）、また周辺に点在する中世遺構、さらには文献・地名・伝承等の侧面からもさまざまな考察が加えられ、中世城郭としての研究・考察が行われた。〔注3〕それによって城郭構成は、南側尾根続きを太田峠の道と大通しで二重に切断しており、南北約200m、東西約100mの範囲のものであることが確認された。



第4図 御城山城跡略図

224 奥殿河内野鉢跡

殿河内奥城跡より大字古城法正谷へ続く尾根伝いに野鉢がおこなわれていたという伝承があるが詳細は不明である。

225 清水十王堂

上殿河内の出雲井神社より東へ200mの地点に位置する。すなわち禪定寺東大門跡として鍋山村誌に記録があるが、現在は五輪塔と一体の地蔵が祀られている。五輪塔の由緒は不明である。おそらく初めからここに安置されていたものではなく、禪定寺東大門跡としてその跡地に十王堂が建立され、さらに十王堂跡に五輪塔が移されたものと考えられる。横に置かれる地蔵についても、十王堂と何らかの関係があるものと考えられよう。いずれにしても、禪定寺東大門跡地として、当時の禪定寺の寺領の広さがしのばれる。

95 殿河内奥城跡

三刀屋川の支流、浜奥川の右岸の独立した丘陵の尾根上に構成されている。標高は約230m、浜奥川の谷部よりの比高は約80mを測る。

長さ約200mの尾根上はほぼ東西方向を指し、突端である西側の二つの頂部は物見郭と思われる単郭である。この物見郭より掘切を設け、5段に連なる郭群が続く。北側は崖状に急落しており、北東尾根との間を大切通として通路となし、北は石峠

へ東方面は「オオナリ(大平)」と呼ばれる平坦地を経て殿河内の集落へ至る。大平より殿河内へ続くこの通路は途中土橋を設け、さらに3ヶ所に郭をませあわせた堀切を施してある。南西谷間へ下ると宮内浜奥から禅定寺へと続き、この南西へ下る路に対して帯状の郭も施されており、位置的にみて戦国期の支城的性格のものと考えられる。



第5図 殿河内奥城網張略図



第6図 殿河内奥城踏査図

96 清水荒神塚

大字殿河内字清水地内、妹尾氏宅（家号前新屋）の裏手の急峻な山麓に位置する。崩土によって和鏡・土師質土器10数点が確認され、さらに肩刃から鉄錘と刀の残欠3本、土師質土器がまとめて出土した。昭和61年度に埋納を確認する調査が実施されたところ、埋納壇が2穴確認され、土師質土器の細片も多数検出された。出土遺物についてはすでに詳細な報告がなされている。
(注4)

大字乙加宮

3 宮内遺跡

三刀屋川左岸の段丘上に存在し、宮内集落東側に位置する。1980年の圃場整備工事に伴い発見された遺跡で、東西100m×南北350mの範囲からは縄文土器5点、弥生土器1点、土師片器、須恵器片、土師質土器、瓦類、石庵丁、石鍤等が採集されている。特筆すべきものとして布目瓦が3点出土している。少量ではあるが、遺跡の性格付けを考える上で貴重な資料といえよう。

5 横原遺跡

横原の集落西方の水田地で、三刀屋川によって形成された舌状の河岸段丘上に位置する。1980年に行われた圃場整備工事に伴い発見された遺跡で、東西150m×南北100mの範囲からは縄文土器の早期末から前期のものが1点、中期後葉のものが2点、後期前葉のものが4点、後期中葉のものが2点、後期のものが5点と、両面に使用痕のみえる磨石1個、石鍤が7個以上出土している。

62 浜遺跡

浜の集落の東および南側の水田地で、三刀屋川の支流浜奥川が形成した扇状地に位置する。1980年の圃場整備工事に伴い発見された遺跡であり、東西125m×南北100mの範囲より縄文土器の早期後葉のもの9点、後期初頭のもの1点、晚期のもの1点、弥生土器片が1点、土師器は古墳時代前期に属する甕片と鼓形器台片がそれぞれ1点ずつ、須恵器は古墳時代から奈良時代に属するものが数点、さらに丹塗土器や石器類が出土している。

68 金屋子鉢跡

大坂の集落で灰谷川の河口に位置する。周辺より多数の鉄滓の分布が確認されたとの伝承がある。

90 鉢畠鉢跡

大字乙加宮の加食出集落にそそぐ灰谷川の中流に位置する。周辺より多数の鉄滓の分布が確認されており、小字名も鉢畠と言う。

226 浜奥川鉢跡

三刀屋川の支流で浜の集落にそそぎこむ浜奥川の右岸で、淀河内奥域の南西部にあたる。過去において多数の鉄滓が確認されているようである。

227 毛利秀麻呂墓

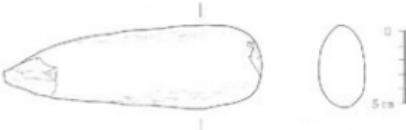
大字乙加宮の禅定寺下から根波へ向う県道出雲仁多線沿いに位置する。毛利秀麻呂がいつの時代の人物かについては不明であるが、墓碑に、「大宝二年〇観行證法禪定門十月十八日毛利秀麻呂」とあり、禅定寺に何らかの関係があるものと考えられる。

228 茄荷谷鉢跡

灰谷川の中流地点で、灰谷と茄荷谷との分岐点に位置する。灰谷川には他にも鉢畠鉢跡や金屋子鉢跡があり、鉢操業がさかんであったことがうかがえる。

229 浜奥川石斧出土地

浜奥川で確認された始刃磨製石斧である。長さ17.3cm・幅5.6cm・厚さ3.1cmを測る。現在は三刀屋町農村環境改善センターに保管展示がしてある。



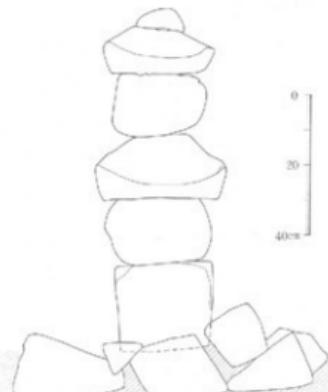
第7図 浜奥川出土石斧実測図

230 下宮内古墳

乙加宮下宮内の戸倉神社より西へ約100mの細長い丘陵の尾根上に位置する。墳形は円墳と思われ、直径約6mのものが二基確認された。築造時期を決定する資料はないが、墳丘から判断すると、概ね古墳時代後期のものと考えてよいだろう。

231 石飛忠良氏宅横古墳

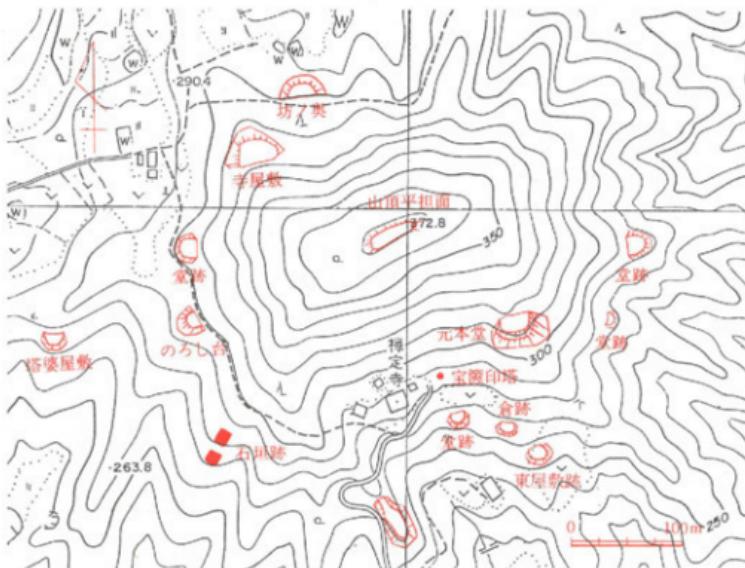
乙加宮浜の集落、石飛忠良氏宅横の畑に位置する。五輪塔が1基立っており、周辺には同様の五輪塔片が点在している。造塔している五輪塔はセット関係が極めて不自然である。おそらくこの五輪塔は二基以上存在していたものがある。ある時期に無造作に集められ放置され、それを再び無作為にセット関係に直して組み合わせたものと考えられる。この地は淀河内奥域より南約1kmの地点にあたり、概ね戦国時代のこの城に何らかの関係を持つ人物の墓であると考えられる。



第8図 石飛忠良氏宅横五輪塔実測図

232 梅定寺下遺跡

梅定寺は三刀屋町大字乙加宮にある天台宗の古刹である。『出雲國風土記』に記載のある奈倍山（現在の梅定寺山）の山腹に位置し、第十番出雲札の観音靈場としても知られる。当寺に安置されている木造聖観音立像（重文）・木造阿彌陀弥如來座像・木造觀音菩薩立像・木造勢至菩薩立像（いずれも県指定）は一本造りの出雲様式を施す仏像として知られ、製作年代は平安初期以前と考えられており、寺院建立がそれ以前のものであることがうかがえる。寺院明細帳の由緒書に、性空上人（910～1007年）が中興してから堂宇伽藍が整い、また『鍋山村誌』には「人皇四十五代聖武天皇勅願の…（中略）…七堂伽藍坊宇四十二箇院の古刹なり、依之領金坊、泉井坊、古覺坊、柳膳坊、奥野坊、清門院等の坊跡今に有之候」とあることから平安末期には寺院として興隆し、その勢力を誇ったものと思われる。梅定寺山及びその周辺はその勢力の大きさを裏づける平坦面や石垣、石列群が多数存在する。また寺領の広さをしのばせる三大門の位置（嚴河内清水十王堂・大谷石峯権現・里坊花立十王堂跡）を明確にするに至った。さらに梅定寺は戦国時代、尼子氏と毛利氏との戦いにおいて、「小早川隆景書状」によれば「依之懸合之内水之上梅定寺河副相抱候城兩所…（中略）…落去候」とあり、當時城として機能していたものと思われる。



第9図 梅定寺周辺踏査図

桜定寺の伽藍配置

一般に境内の多くの堂宇を七堂伽藍と呼ぶ。七堂伽藍とは境内の堂宇が完備された状態のことと、金堂・講堂・塔・鐘樓・経蔵・僧房・食堂を指す。七堂は「悉堂」の語の転化であるという説があるが、「悉」とは「ことごとく」との意であり、堂宇がすべてそなえられたということになる。この制度は、すでに奈良時代には成立していたと考えられる。七堂伽藍は宗派によって建物の種類や名称は一定していない。それらの配置も時代や宗派によって様々であり、諸堂建築においても全体としてももちろんのこと、細部構造も多種多様で変化に富んだものである。

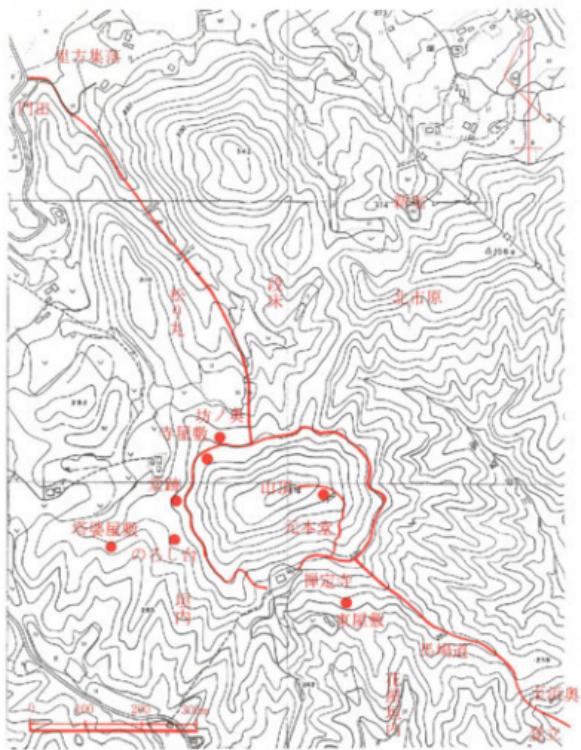
桜定寺は平安前期には寺院施設が整ったと考えられる天台宗の古刹である。天台宗は、『法華經』を基本經典として中国の天台人師、智顗によって大成された仏教の一宗派で、平安時代初期に最澄が日本に伝え、禪・戒・密教をあわせて独自の教理を展開したものである。同時代に空海によって伝えられた真言宗とともに新佛教として確立し、また密教建築がもたらされることにより比叡山・高野山といった山地伽藍が営まれる。現在、山地伽藍の寺院発生期の唯一の遺構を残すのは奈良県の室生寺のみである。奈良時代の學問本位の寺院から修行の場の寺院として移行し、密教の影響を多分に受けたであろう古い建築を残している。

こうした新佛教の影響を出雲地方も受け、桜定寺が寺坊を持つ天台寺院となったのは、寺院明細帳の由緒書に性空上人(910~1007)が中興して七堂伽藍が整い、坊舍四十二院を数えたとあり、平安末期には寺院として独立したものと考えられる。

奈良時代	塔	金堂	講堂	鐘樓	経蔵	僧房	食堂
法相	塔	金堂	講堂	鐘樓	経蔵	左堂	右堂
華嚴	五重塔	金堂	講堂	中堂	後堂	左堂	右堂
天台	柏輪棕	中堂	講堂	戒壇堂	文殊櫻	法華堂	常行堂
真言	大塔	金堂	講堂	灌頂堂	経堂	大師堂	五重塔
真言	五重塔	金堂	講堂	鐘樓	経蔵	大門	中門
禪宗	山門	仏殿	法堂	東司	西淨	僧堂	庫裏
禪宗	山門	仏殿	法堂	廁	寢堂	禪堂	食堂
禪宗	山門	仏殿	法堂	鐘樓	鼓樓	東方丈	西方丈
禪宗	山門	仏殿	法堂	東司	沿坐	僧堂	庫院

第10図 七堂伽藍構成図

(石田茂作氏による一部加筆)(注9)



第11図 禅定寺周辺踏査図

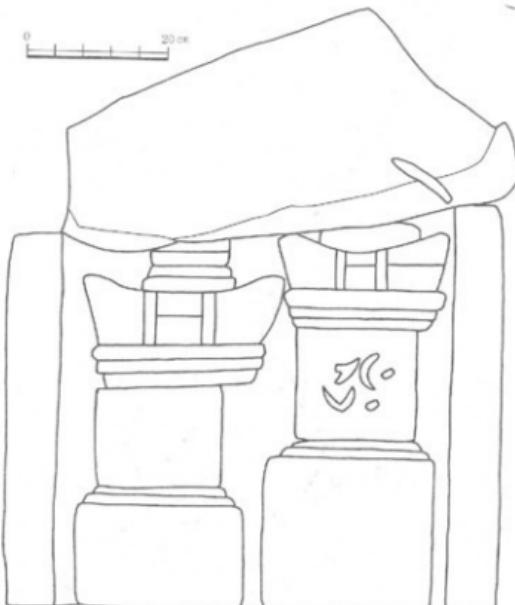
(元本堂群と呼ぶ)と、山頂の北側裾野に広がる平坦地群(坊の奥群と呼ぶ)、西側に広がる平坦地群(西群と呼ぶ)である。元本堂群は、浜奥の集落から続く「馬場道」が禅定寺山周回路と交差する地点を中心配置されており、当時の伽藍の中心部の一つと考えられる。一方坊の奥群は、里坊集落から狭い谷筋の道と周回路が交差する地点を中心に配置されており、山裾の比較的平坦な地形を利用して、平坦地を作り出している。石積み基壇らしい遺構が見られることや、谷筋道の入口付近に「門田」という地名が残っていること、当時の幹道が北側を通っていたこと等を考え合わせると、ある時期にこの坊の奥側が正面であった可能性も考慮する必要がある。西群は、小形の平坦面が数箇所に認められる。石垣跡や「のろし台」という地名が残っていることから、戦火の危険にさらされた時期の遺構である可能性もある。以下それぞれの遺構について詳述したい。

配置の概略

現禅定寺は、禅定寺山の南斜面に本堂(観音堂)、薬師堂、庫裏、座王堂、仁王門を残すのみである。しかし、この禅定寺山周囲の踏査を行うと、山を山道がぐるりと巡り、その周囲に点々と加工段、平坦地が見られる。これが四十二坊を誇ったという禅定寺の伽藍の遺構と考えられる。これらの遺構は、大きく3群に分かれることがわかる。すなわち現禅定寺の東側に当たる元本堂を中心とする平坦地群

禪定寺　本堂東古墓

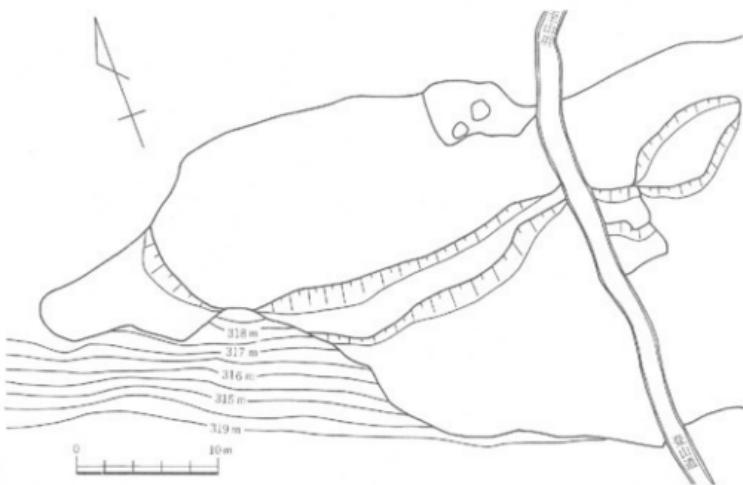
禪定寺の本堂より東へ約50mの禪定寺山山頂へ登る道筋沿いからさらに西へ入った地点に位置する。存在する古墓は宝篋印塔2基である。もともとこの地にあったものではなく、周辺に点在していたものを二基のセット関係に組み合わせている。二基ともに粗雑な作りで、笠部は隅鉢突起の返りが進んでいるが明瞭な作りではなく緩線にて表現している。一基は塔身に梵字を持つ。二塔とも作りは類似しており概ね戦国時代のものと考えてよかろう。



第12図 禪定寺東宝篋印塔実測図

元本堂跡

禪定寺山中復約320m、遠くに琴引山・大万木山などが見通せる景勝閑寂の地である。尼子氏と大内氏による戦国乱世の最中数度の焼き打ちにあい、伽藍堂宇ことごとく焼失した禪定寺の本堂が建立していたとの伝承がある地で、東西約40m・南北約25mの三段からなる平坦地が当時の面影を彷彿させる。特に上段の平坦部は東西24m・南北12mを測り、ほぼ長方形を呈する。現在のところ本堂が建立していたとの伝承を裏づける資料がないため想像の域を脱しないが、周辺からは人頭大以上の大きさの石が多数確認され、寺院施設に何らかの関係を持つものと考えられる。現在の禪定寺の境内に建てられた諸堂の中には、本堂の他に護摩堂・薬師堂・藏王堂・子守堂・弥山堂など修驗行場と受けとめられる堂名を持つものが存在することから、禪定寺の草創期は密教の影響をうけた修驗の行場であったのだろう。これが後に独立した寺院として確立されていき、この地に本堂を構えていたものと考えられる。

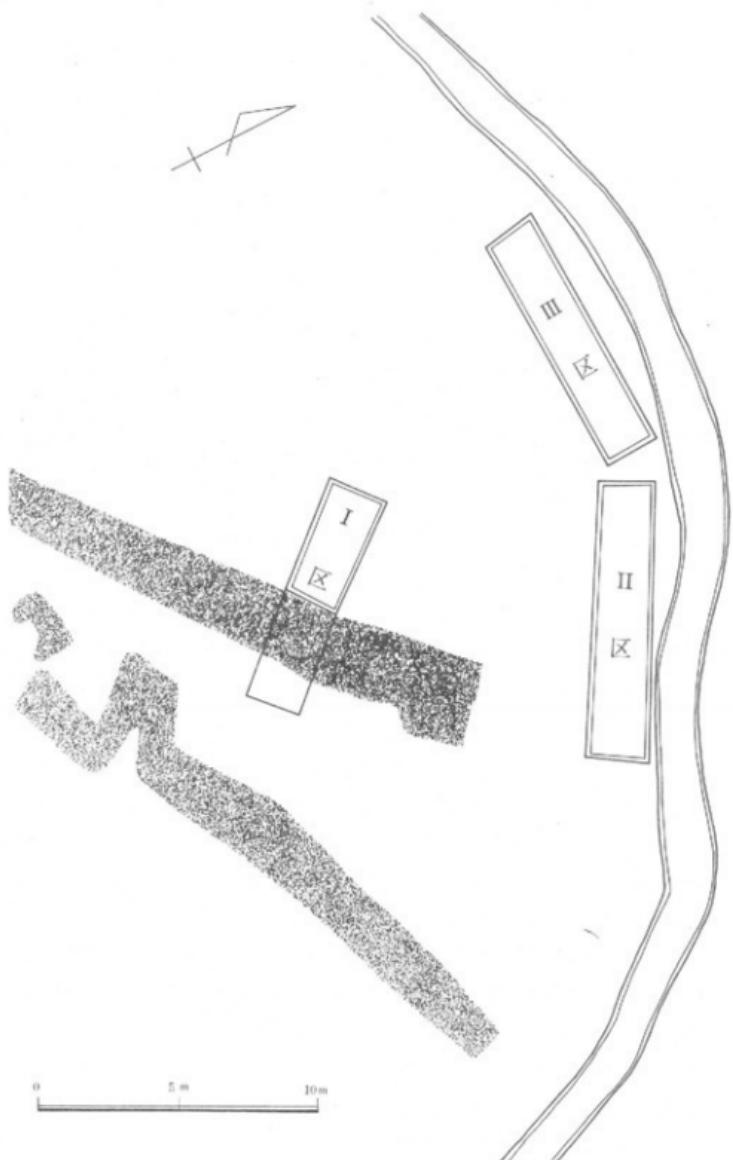


第13図 禅定寺元本堂跡実測図

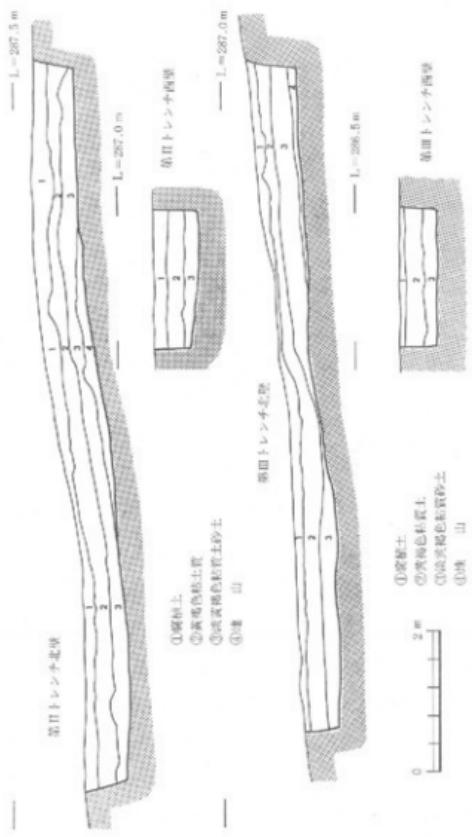
寺屋敷遺跡

禅定寺山の北西にあたり、標高約300mの眼下に里坊、遠くは出雲神原から大社方向まで一望できる山頂中腹に位置する。この地は現在の禅定寺と山を隔てて正反対にあたり、禅定寺が興隆を誇った時代の四十二坊のうちのひとつでないかという考えが一般的である。それとは別に、禅定寺はもともと禅定寺山北側のふもとに建立されていたとの伝承がある。すなわち初期のころの禅定寺は現在の出雲神原方向から参詣路が続いており、この参詣路にちなんで「花立」「灯籠田」「門田」といった地名が現存したものと考えられる。「寺屋敷」と呼ばれるこの地の周辺には、「坊ノ奥」「塔婆屋敷」「のろし台」といった寺院に関連するであろうと思われる地名が存在していることからも、この伝承を裏づける手がかりと言えるのではないだろうか。

これらいくつかの根拠のもとに「寺屋敷」は禅定寺の早期段階において重要な位置を占めるとの考えに基づき、遺跡としての性格と範囲を明らかにする目的で、試掘調査を実施するに至った。この地は坊跡が存在していたと考えられる平坦部と、それに何らかの関係を持つと思われる石垣列が二段に施されており、また札打道がこの平坦地を形成する恰好を施す。したがって調査区はこの石垣列に直交する形で8m×2mのトレンチを設定しこれをI区。さらに札打道に沿って10m×2m・9m×2mのトレンチをそれぞれ設定しII区・III区とした。



第14図 寺屋敷遺跡調査区配置図



第15図 寺星敷遺跡II・III調査区土層図

であろうと思われたが、これを明確に判断するには至らず、石垣列の範囲と寺院遺構の可能性も否めないとして、調査を打ち切り、埋めもどしにかかった。

第II調査期 第I調査より北へ約8mの札打道沿いに設定した。土層は表土約15cmを除去すると黄茶褐色粘質土が約20cm堆積しており、さらに下層には黄褐色粘質砂土が約20cm堆積していた。遺構・遺物の検出には至らなかった。

第III調査期 第II調査区の東へ同じく札打道沿いに設定した。土層は第II調査区と同様である。この調査区は当初石垣列の続く範囲が確認されると考えられた。調査区内に石群は検出されず、石垣列は調査区前約4mの地点まで続くものと思われる。

第I調査区 本調査区は位置的に石垣列及び平坦地の中心部にあたり、調査範囲においてもっとも遺構・遺物を検出しうると考えられた。しかし今回の調査は遺跡の分布範囲確認のための調査であり、「寺星敷」の全貌を明らかにする調査・考察は次回に期するものとしていた。したがって遺跡として明確な遺構・遺物を検出した場合は、ただちに調査を中断して埋めもどすことを前提とした。

調査区は石垣列部を除いた平坦部の表土約20cmを除去すると、予想どおり人頭大の石が群をなして検出された。これらの石群は、平坦部に存在していたであろうと予想される寺院（坊）跡の礎石とは考えにくく、むしろ石垣列の流

出したものと考える方が自然

小 結

三刀屋町の遺跡詳細分布調査は昭和62年度より今年度まで継続して行われた国庫及び県の補助事業であったが、本書において三刀屋町全地区を終了した。今年度の調査は狭い範囲ではあったが、新たに数ヶ所の遺跡が確認された。また全地区を総括するにはいま少し時間を必要とする。

今年度調査の結果を総合すると、古代以前にさかのほる遺物散布地は三刀屋川流域の段丘半垣地において分布が密であった。当初の考えでは单坊の集落付近から、何らかの古い遺物等の確認ができるのではないかと予測していたが、地表観察であることから縄文・弥生時代の古い遺物を検出することはできなかった。しかし、今後さらに段丘や丘陵地においては新たな知見が得られる可能性がある。

城跡についてはこの地方の地理的事情から考えても数多いことはあらかじめ予測のつくところであった。事実、昨年度の調査において20例を超える報告がなされている。本年度もさらに細密な調査を行い、昨年度報告のあった城郭に隣接のある郭跡や掘切、土橋を確認した。山城築城の初期段階において社会事情の変化や戦術方法の進歩により、さまざまに工夫されたと思われる築城配置は三刀屋のじや山城・尾崎城との関係を考える上で非常に興味深い。^(p.10)

城郭とともに数多く確認できると予測できたのが禅定寺に隣接した坊跡である。禅定寺は最盛期に四十二坊をも数える大寺院に発展している。そのうちの大多数の坊を戦国期の最も焼失しており、これらの焼失した坊跡をできるだけ明確に確認しようとしたが、資料収集の不手際から歴史的な裏づけを明確にするには至らず、坊跡であろうと考えられる数ヶ所を分布地図に確認するにとどめた。また禅定寺は初期の頃、出雲稗原方向を正面に建立されていたとの伝承もあり、興味深く調査を行ったが、明確な判断を下すには至らなかった。今後さまざまな見知から、さらに深い研究が進められて行くことを期待したい。

製鉄遺跡は鉄が大量の木炭と砂鉄を原料とすることからも、この地域は絶好の立地条件であるとともに交通の便もよく、また鉛製鉄の移動性などから考えても、今後更に多くの遺跡が確認されることと考えられる。

関係地域の方々には、文化財の关心が高く、情報提供や現地の道案内等、多大の協力をいただいた。今後これらの遺跡は常に地域住民の共通の文化遺産であり、考古学的な調査によって研究成果を得られるとともに、地域文化の社会教育の資料として活用されていくことを心より祈念するところである。

注

- (1)『殿河内遺跡発掘調査報告書』 島根県三刀屋町教育委員会 昭和61年
- (2)『太田横穴群発掘調査報告書』 島根県三刀屋町教育委員会 昭和57年
- (3)『殿河内遺跡発掘調査報告書』 島根県三刀屋町教育委員会 昭和61年
- (4)『殿河内遺跡発掘調査報告書』 島根県三刀屋町教育委員会 昭和61年
- (5)『鍋山村誌』 第一号號
- (6)『比叡山と高野山』 勝野隆信（日本歴史新書）
- (7)『比叡山と高野山』 勝野隆信（日本歴史新書）
- (8)『三刀屋町誌』 三刀屋町 昭和57年
- (9)『歴史散歩事典』 山川出版社 1979年より
- (10)『三刀屋城跡調査報告書 I～III』 島根県三刀屋町教育委員会 昭和57年



中古墓



饭塚正夫宅上山五輪塔

図2



御城山城跡



清水十王堂



殿河内奥城跡



殿河内奥城大平（オオナリ）

図4



殷河内奥城土橋



殷河内奥城掘切



殿河内奥城掘切

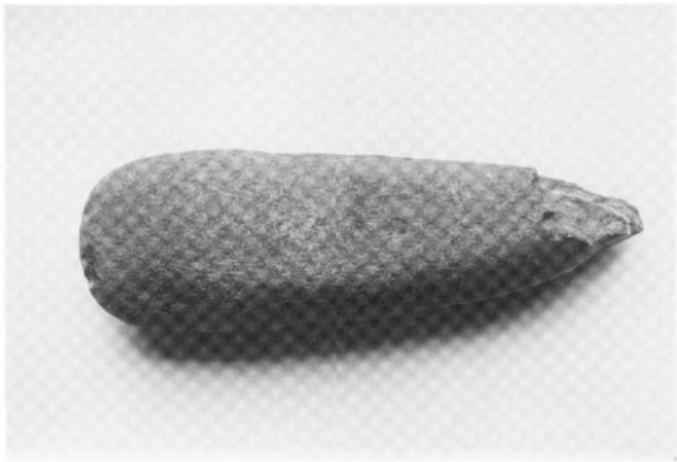


殿河内奥城刀研池

図6



毛利秀麻呂墓



浜奥川出土石斧



石飛忠良氏宅横五輪塔



禅定寺山

図8



禪定寺



花立十王堂より禪定寺山を望む



禪定寺東宝鍾印塔



元本堂

図10



寺屋敷遺跡調査風景



寺屋敷遺跡調査区土層状況

詳細分布調査報告書

三刀屋町の遺跡Ⅲ

—鍋山地区(禅定寺周辺)—

発行

1991年3月

三刀屋町教育委員会

島根県飯石郡三刀屋町三刀屋944

印刷 (有)木次印刷

島根県飯石郡三刀屋町三刀屋

